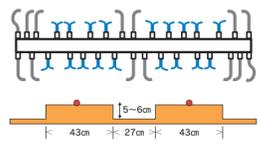


大豆栽培こよみ

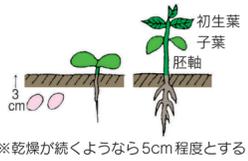
部分浅耕—工程播種を導入し、適期播種に努めましょう！

時期	6			7			8			9			10			11								
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下						
主な作業	適地の選定			除草剤散布 (耕起・播種(施肥) (耕起・整地))			中耕・培土			害虫防除			病害虫防除			カメムシ補正防除			収穫準備			刈取		
作業内容	<p>同一ほ場にフクユタカ以外黒豆等の品種を作付しない排水良好でかん水の恐れがないほ場</p> <p>pHの矯正 適正 pH 6.0 ~ 6.5、土づくり 参照</p> <p>完全堆肥の施用</p>			<p>ラウンドアップマックスロード、またはバスタ液剤を使用する。 種子消毒 (ハト害、紫斑病) 参照</p> <p>除草剤基準 参照</p> <p>播種時期と栽植密度 参照</p> <p>施肥基準 参照</p> <p>麦ワラはすき込む。</p>			<p>1回目 本葉2枚から4枚までに行う。</p> <p>2回目 本葉5枚から6枚までに行う。 8月10日頃までに必ず1回は実施する(倒伏防止と雑草対策)。</p> <p>ハスモンヨトウのふ化幼虫が群集している白変葉を早めに除去する。</p> <p>病害虫防除基準 参照</p>			<p>白変葉が目立ってきたらハスモンヨトウの一斉防除を行う。</p> <p>病害虫防除基準 参照</p>			<p>※ハスモンヨトウの発生は、隣接ほ場に被害を与える。 紫斑病、カメムシ類、ハスモンヨトウの薬剤防除</p> <p>病害虫防除基準 参照</p>			<p>病害虫防除基準 参照</p> <p>紫斑病、マメハンミョウ、ミナミアオカメムシ幼虫、ハスモンヨトウ幼虫、ミナミアオカメムシ成虫、オオタバコガ幼虫</p>			<p>刈取適期は成熟期7日後から(子実水分16%以下)</p> <p>成熟期は大部分が落葉し莢を振ると、音をたてる程度に乾燥した時期</p> <p>青立ち株や雑草は刈取前に抜取る</p>			<p>茎や莢が入らないようコンバインの風量を調節する。</p>		
※収量向上のため、麦ワラは全量すき込みましょう。 ※刈取の際は土のかき込み、雑草の汁による汚損粒に注意しましょう。																								

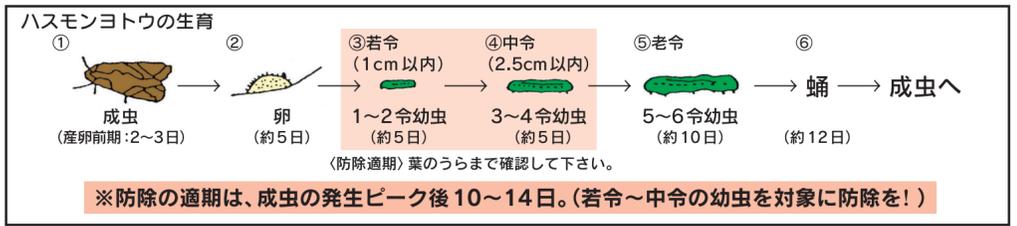
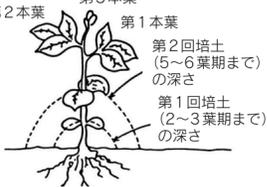
部分浅耕—工程播種



播種・出芽期



中耕・培土



◆品種特性表 (7月10日播種)

品種名	開花期	成熟期	耐倒伏性	10a当り子実重	百粒重
フクユタカ	8月21日	11月4日	中	339kg	30.9g

※引用元:開花期、成熟期(現地のデータ)、それ以外(福岡県農林業総合試験場データ)

◆種子消毒基準

薬剤名	処理方法	処理量	備考
キヒゲンR-2フロアブル	塗沫	種子10kgに200ml	ハト害、紫斑病
クルーザーMAXX	塗沫	種子10kgに80ml	ハト害、紫斑病、ネキリムシ、莢疫病

◆施肥基準

大豆作付条件	肥料名	基肥	成分量			遅播はちくごのめぐみ444を使用する
			窒素	りん酸	カリ	
一般	PK化成40号	30	—	6.0	6.0	遅播はちくごのめぐみ444を使用する
遅播等	ちくごのめぐみ444	20	2.8	2.8	2.8	

※大豆播種は肥料焼けし易いので、播種と施肥位置が重ならないように注意する。

◆播種時期と栽植密度

品種名	フクユタカ (1株当り2粒)	
播種期	7月5~20日(適期播き)	7月下旬~(遅播き)
条間(cm)	65cm	
株間(cm)	30~20	15~10
10a当り播種量(kg)	3.0~4.0	6.0~8.0

※播種深度は3cm程度が適当であるが、土壌が乾燥している場合はやや深め(5cm程度)にする。
※播種量は適期内で早めの時期は少なめに、遅めの時期は多めとする。

◆土づくり

資材	施用量	備考
生石灰	100	酸性障害対策、水と反応して発熱する。播種前の2週間前までに施用する。
炭酸苦土石灰	200	酸性障害対策、大豆に必要なカルシウムを含む。
オイスターミネラル	100~200	酸性障害対策、大豆に必要なケイ酸分、微量元素を含む。
ミネラルG	160	酸性障害対策、カルシウムのほかケイ酸も含む。

※土壌の酸度(pH)矯正は、大豆の養分吸収や根粒の活性を高めるために行う。

安全と信頼は生産者のチェックから!!STOP異物混入

被害粒	紫斑病・褐斑粒	皮切れ・剥皮粒	汚損粒(泥汚れ等)
発生原因	・前年産の罹病莢葉 ・罹病種子の使用 ・適期防除の不徹底	・収穫時期の遅れ(過乾燥)	・降雨直後および朝露後に収穫 ・雑草、青立ち株の混入 ・コンバインの刈り取り位置が低い(土のかき込み)
防止策	・種子更新100% ・種子消毒の徹底 ・適期防除	・適正な子実水分での収穫作業 子実水分:16%以下 収穫開始:茎水分50%以下 収穫時間:茎水分の高い朝夕を避ける 午前10時~午後5時まで	・降雨直後や朝露発生時の収穫を避ける ・収穫まえの雑草、青立ち株の抜き取り ・コンバイン収穫時の刈り取り位置に注意

◆除草剤基準

使用時期	除草剤名	10a当り使用量	希釈水量	留意点
播種前	ラウンドアップマックスロード	200~500ml	50~100ℓ	隣接、周辺の水稲など他作物への飛散を防止する。ラウンドアップマックスロードは効果を高めるため、出来るだけ100倍希釈する。(少量散布の場合は水量を25~50ℓにする)
	バスタ液剤	300~500ml	100~150ℓ	
播種直後 出芽前	ラクサー粒剤	4~8kg	—	覆土は2~3cm以上とし、よく整地して鎮圧する。二重散布にならないように均一に散布する。
	ラクサー乳剤	400~800ml	100ℓ	広葉雑草・イネ科対策 ホオズキ対策:フルミオWDGを5~10g/10a(希釈水量100ℓ)を混用する。但し、フルミオWDG使用後は、タンクやホース、ノズルを専用洗浄剤で洗浄する。
	プロールプラス乳剤	400~600ml	100ℓ	
生育中	パワーガイザー液剤	200~300ml	100ℓ	出芽直前~3葉期まで(雑草発生始期~2葉期)
	ポルトフロアブル	200~300ml	100ℓ	イネ科雑草対策(3~10葉期) 但し収穫30日前まで スズメノカタビラを除く
	大豆バサグラン液剤	100~150ml	100ℓ	アサガオ類対策。大豆2葉期~開花前 但し収穫45日前まで
	アタックショット乳剤	30~50ml	100ℓ	アサガオ類対策。本葉2葉期~開花前、但し収穫45日前まで。大豆に褐変、白化などの薬害が生じることがある。
バスタ液剤	300~500ml	100ℓ	アサガオ、ツユクサ等対策(大豆にかからないように畝間散布する) 但し収穫28日前まで	

※中耕・培土による耕種防除も併せて行う。

◆病害虫防除基準

時期	対象病害虫	薬剤名	散布濃度	10a当り使用量	使用回数	使用時期
液剤	8月下旬	ハスモンヨトウ	ブレオフロアブル	1,000~2,000倍	100~300ℓ	2回以内 収穫7日前まで
	9月中旬	ハスモンヨトウ	プレバソフフロアブル5	4,000倍	100~300ℓ	2回以内 収穫7日前まで
		カメムシ類	キラップフロアブル	2,000倍	100~300ℓ	2回以内 収穫7日前まで
		紫斑病	トップジンM水和剤	700~1,500倍	100~300ℓ	4回以内 収穫14日前まで
10月上旬	カメムシ類	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	100~300ℓ	2回以内 収穫7日前まで	

時期	対象病害虫	薬剤名	散布濃度	10a当り使用量	使用回数	使用時期
へり防除	8月下旬	ハスモンヨトウ	ブレオフロアブル	8~16倍	0.8ℓ	2回以内 収穫7日前まで
	9月中旬	ハスモンヨトウ	プレバソフフロアブル5	16~32倍	0.8ℓ	2回以内 収穫7日前まで
		カメムシ類	キラップフロアブル	16倍	0.8ℓ	2回以内 収穫7日前まで
		紫斑病	トップジンMゾル	5倍	0.8ℓ	4回以内 収穫14日前まで
10月上旬	カメムシ類	スタークル液剤10	8倍	0.8ℓ	2回以内 収穫7日前まで	

時期	対象病害虫	薬剤名	10a当り使用量	使用回数	使用方法
播種時~本葉2葉期	ネキリムシ	ネキリエースK	3kg	2回以内	土壌表面株元処理

※農薬の登録内容は随時更新されますので使用する際は、包装容器が袋に記載されている有効期限および登録内容を確認して下さい。

※農薬の安全使用と隣接する作物への飛散防止対策を徹底しましょう!

※作業日誌、生産工程管理チェックシートは別に配布しますので、必ず記帳、提出をお願いいたします。